

topic

1

東日本大震災被災地 大槌町の調査報告

今回、被災した高齢女性の人つきあいの変化に関する研究調査のため、住居学科平田研究室・石川研究室の合同で、東日本大震災の被災地である、岩手県大槌町に調査に訪れました。10月16日から19日の計3泊4日という短い間でしたが、私たちが見た4年経過した被災地の現状と、現地で感じたことについて報告します。



大槌町とは？

大槌町は岩手県上閉伊郡にあり、太平洋に面しています。ひょっこりひょうたん島のモデルではないと言われる、蓬萊島があることでも有名です。沿岸部にあることから、津波によって右に示すような甚大な被害を受けました。また、現在も多くの方が仮設住宅での生活を強いられており、通常の生活の再興にまでは至っていません。人口の27%もの人がまだ仮設暮らしです。

表1 人的被災状況^{1,2)}

区分	人数
死亡届受理数	1233人
行方不明者	1人
関連死	51人
人口	11513人

平成27年10月1日時点

表2 応急仮設住宅の入居状況³⁾

区分	内容
団地数	48団地
供給住宅戸数	2140戸
うち入居世帯数	1569世帯
うち入居者数	3159人
入居率	73.3%

平成27年9月30日時点

おがくち 大ヶ口災害公営住宅

大ヶ口の災害公営住宅は2013年に竣工した、大槌町初の戸建て災害公営住宅です。UR都市機構が携わっており、コミュニティの再生に取り組んだ公営住宅です。バスから降り歩いて目的地へと向かう途中、遠くから見てもこの公営住宅はひと際目を引きました。周囲の景色と馴染みながらも、統一性のある外観。長屋のように住宅が計画されており、まるでこの公営住宅自体が一つのまちであるような印象を受けます。

住戸同士は向かい合わせに配置されており、中心を広い通路が通っています。花壇やベンチなどが設置され、住民にとっての憩いの場となっていました。実際、私たちが訪れた時もベンチで日光浴をする方や、縁側で近所の方と談笑している姿をお見掛けしました。また、団地の入口には集会所と広場があり、居住者のサークル活動や催し物を促すかたちになっています。

周囲をぐるっと歩いてみると、傾斜地に建てられていることを考慮して、集会所や住宅の入り口にはスロープが設けられているところがありました。高齢の居住者に対する配慮がなされており、住み手の快適性が考慮されています。この住宅を構成する要素の全てが居住者の豊かな暮らしを第一に考えられており、低層に建てられた木造の和風住宅からは木のあたたかみのみならず、作り手の心のあたたかさを感じます。

被災者の方々は、津波によって住宅という安息の地を流され、避難所、仮設住宅と仮の住まいで4年あまりを暮らし続けてきました。そんな人たちにとって、この大ヶ口の公営住宅のようなあたたかみのある住宅は、安息の地としてふさわしい空間を提供していると感じました。

大ヶ口災害公営住宅



高台からみた大槌町

次に私たちは大槌町全体を見渡すために、高台を目指しました。盛り土工事の途中で砂利と土が一面に広がる中に、ぽつんと建った旧大槌町役場庁舎が目を引きまします。津波に襲われコンクリートむき出しの姿は、人々が背負う想像を絶する体験や震災の記憶を象徴しているかのよに感じました。

高台へと向かう斜面には墓地が広がっており、墓石は津波によって折れてしまっているものが多く見受けられました。また木も枯れ、津波後に町を襲った山火事の痕跡が残っています。震災の記憶を風化させないようにという意向からか、火事によって溶け落ちた寺院の鐘や、津波で半分に折れてしまったお地藏さまなど生々しい震災の爪痕がそのままに残されていました。

急な斜面を登り切った私たちの眼に飛び込んできた景色は、土の黄土色と海の青色の二色だけで構成されていました。ところどころに工事に使われている重機や、再建した・または流されなかった住宅が見られましたが、多くは土一色。復興の遅れを感じざるを得ませんでした。自分がいま歩いてきた道は、誰かが暮らしてきた家があった場所なのではないだろうか。そんなことを考え、人間の想像を遥かに超える自然災害に対して恐怖を感じると共に、震災後4年が経過しても人々が安心して暮らしをおくることができる状態ではないことを痛感しました。

進まないかさ上げ途上の様子



今回の調査を通して

今回の調査では被災地の方々が柔和に私たちを受け入れて下さったことが、一番印象的でした。調査に伺ったデイサービス施設では、貴重な時間を割いて頂いたにも関わらず、私たちの姿が見えなくなるまでいつまでもいつまでも手を振って下さった光景が、今でも鮮明に思い出されます。

また、大槌町の方々に話を伺った中でも、災害公営住宅の整備の遅れなどの「住まい」の問題が今の大きな課題であるというお話が挙がりました。住居学を学ぶ者として、そして一人の人間として、被災地とそこに住む人々と向き合うことを忘れてはならないと強く感じました。

平田研究室研究生 阿部 一咲子



旧大槌町役場庁舎



溶けた江岸寺の鐘



先生方による被災地の説明

- 1)大槌町：東日本大震災 人的被災状況（平成27年10月1日時点）、
<http://www.town.otsuchi.iwate.jp/docs/2012122100023/>、平成27年6月1日。
- 2)岩手県政策地域部：いわての統計情報。
<http://www3.pref.iwate.jp/webdb/view/outside/s14Tokei/bnyaBtKekka.html?C=B0203&R=1002>、平成27年10月30日。
- 3)岩手県：応急仮設住宅（建設分）供与及び入居状況（平成27年9月30日現在）、
<http://www.pref.iwate.jp/saiken/sumai/023870.html>、平成27年11月12日。

学生の感想

今回の調査で初めて被災地に足を踏み入れました。

津波を起こした海と造成のための土が多くの山になっている状態を見て、自然の力の大きさとそれに対して建築の力の及ばなさに衝撃を受けたことが記憶に残っています。

出会った方々は大変な経験をされたはずなのに感謝を忘れず、前向きな方ばかりで、多くのことを学ばせていただきました。

大槌町の現状をしっかりと論文にまとめ、今回感じたことを忘れずに今後も考え続けたいと思います。

平田研究室4年 櫻井 祐希

「遠くまで来てくれてありがとう、話を聞いてくれてありがとうね。」

大槌町の調査で印象に残ったのは、宿に泊めて下さった方や震災当時のお話を下さった方々の心の温かさでした。彼らにとって家族・友人、分け隔てなく誰かに親切にしてもらったことが自分も何か行動を起こそう、立ち上がろうという原動力になっていたようでした。周りの人と支え合い、辛い経験を乗り越えている方々だからこそ、人との繋がりを大切にしているのだ、と身をもって感じました。

平田研究室4年 鈴木 萌菜美

震災から4年がたちましたが、以前町があった場所はまだ土が盛りられているだけで、想像していた以上に復興までの道のりは遠いんだな、と感じました。

4年たった今だからこそ聞けるお話もたくさんあり、段々と報道される機会が減っていく中こうして実際に訪れることには大きな意味があると思います。今回の調査で大槌町がこんなに良い所だったのだと知ることが出来たので、もっと多くの人に被災地について知ってほしい、そして復興できる日まで支援し続けていかなければならないと考えさせられました。

平田研究室4年 目加田 実穂